

ハイブリッドとヘゲモニー、「植民地主義の再検討」研究会のめざすもの

著者	中島 成久
出版者	法政大学比較経済研究所
雑誌名	比較経済研究所ワーキングペーパー
巻	107
ページ	1-9
発行年	2002-03-15
URL	http://hdl.handle.net/10114/3910

ハイブリッドとヘゲモニー、「植民地主義の再検討」研究会のめざすもの

中 島 成 久(国際文化学部教授)

I. 人種主義、植民地ナショナリズム

ベネディクト・アンダーソンの業績を徹底的に検討することから、このプロジェクトの基本的な問題は生まれた。¹アンダーソンの『想像の共同体』はナショナリズム、エスニシティ、ポストコロニアリズム研究に大きな影響を与えた。ここではまず、人種主義研究に大きな影響を与えた側面と、植民地・ナショナリズムの変質と抑圧の機構としての国民国家という問題から、アンダーソンの業績を検討してみよう。

ベネディクト・アンダーソンは、『想像の共同体』のいたるところで、「人々は何故想像の産物である国民というもののために死ぬことができるのか」という問いを発している。20世紀は戦争の世紀であったが、戦争の犠牲者を国のために殉じた殉教者としてたたえ、その愛国的な行為を賛美し、その純粋性が強調されるほど、その悲劇性は軽減される。ここで、愛国心とナショナリズムは結合する。²

アンダーソンは、植民地支配者の人種主義的愛国心と、被支配者のゲマインシャフト的表象に満ち溢れたナショナリズムの違いに注目している。帝国主義的支配や戦争を賛美する数多くの文学、音楽、芸術作品の中に、人種主義的感情が満ちているのは、当然といえよう。だが植民地支配から立ち上がろうとする植民地ナショナリズムの側には、支配者への憎しみが驚くほどない、とアンダーソンは断言する。

こうしたことは、たとえば、日清戦争の賠償として1895年の「日清講和条約」を根拠として、日本によって植民地支配を受けた台湾でも指摘できる。台湾「原住民」研究者の松沢員子は、台湾原住民の人々が、日本統治時代に日本軍関係者から、「バカヤロー」と罵られ、自分自身のアイデンティティの拠り所となった伝統文化への恥辱観とマイナスイメージを深く植え付けられてきたことを指摘しつつも、どこの村でも昔からの友人であるかのように自分を歓迎してくれたことのアンバランスを指摘している。³

松沢員子は、その問題の重要性を認めつつ、それ以上の追求をしていない。こうした「親日的感情」を、たとえば、韓国における「反日感情」と比べてみて、その落差があまりにも大きいのに驚く。私自身のインドネシアにおける個人的体験でも、日本統治時代の無慈悲な行為について糾弾されることはあるが、「日本のインドネシア占領がインドネシアの解放をもたらした」という言説は、当のインドネシア人自身にもかなり普及しているもので、韓国ほどの反日意識は見られない。⁴

アンダーソンは、植民地支配者の人種主義と、オフィシャル・ナショナリズムに由来する人種主義とは、相互に由来するが、別々の現象として捉えようとする。オフィシャル・ナショナリズムの成立の背景には、19世紀の半ば以来活発になったポピュラー・ナショナ

リズムの流行があった。そのポピュラー・ナショナリズムと関連して、20 世紀初期に植民地解放運動という形をとって植民地ナショナリズムが登場する。⁵

オフィシャル・ナショナリズムと植民地ナショナリズムの人種主義を、アンダーソンは次のように述べている。

人種主義が 19 世紀にヨーロッパの外で発達した時、二つの相互に関連する理由からそれは常にヨーロッパの支配と結びついてきた。最も重要なことは、オフィシャル・ナショナリズムと植民地への支配者の言語の押し付けである。オフィシャル・ナショナリズムは、存立を脅かされている王朝と貴族層 上流階級 の、大衆的で一般庶民のナショナリズムに対する典型的な反応である。植民地人種主義は、王朝の正当性と国民的な共同体を接合させる「帝国」という観念の点では、最も主要な要素である。それによって英国領主は他の英国人よりも、優れていると思い込む。後期植民地帝国の存在は、その地の貴族層の保塁に役立った。というのは、植民地貴族層の保塁はグローバルでモダンな舞台に、古い権力と特権を保持しようと現われてきたからである。⁶

アンダーソンによれば、植民地本国人と植民地政府軍の間には、目に見える大きな差異が存在したという。それこそ植民地軍側の人種主義を明瞭に反映したものであった。植民地本国軍が国家を守る職業軍人の集団であったのに対して、植民地軍は一部の将校を除けば、少数民族出身の傭兵が中心で、彼らは正規戦専用というよりはゲリラ戦対策、あるいは暗殺要員といった目的に特化していた。

このような植民地軍人間の傾向は、さらに進んで「植民地人種主義」と表現すべき特有な形態の人種主義を生み出した。次に検討するアン・ストローラーに言わせると、このような意識を基礎にして、「白人」という人種意識が生まれた。そしてそれは、近代ヨーロッパに固有な「人間」観と共振して、「人種主義」を基礎付けた。

アンダーソンの議論はそこまで徹底していないのであるが、「植民地ナショナリズム」の運命をアンダーソンがいかに捉えているかを検討すると、解決の方向が見えてくる。

アンダーソンは、「新しい社会、古い国家」と題する論文において、インドネシア・ナショナリズムの変質を、「国民・国家」に本質的な問題として捉えている。日本語では「国民国家」と国民と国家を連続して捉えるが、英語では、Nation-State というように、ネーションとステイトの間に小さなハイフンで結ばれていることに注目するようアンダーソンは主張する。ネーションとステイトとは、「氏も素性も違うもの同士の思いがけない結婚」だと言うのである。⁷

ネーションとは「ある地域の出身者、同じ職業の人々」を意味していたが、それがフランス革命を経て次第に、民族、国民といった意味を持つようになった。これに対して、ス

テイトとは、中世の教会権力をさす言葉であった。ところが教会権力が、世俗の政治権力にとって代われ、絶対王政が西ヨーロッパに成立すると、そうした絶対王政の権力を表わす言葉がステイトとなった。ルイ・14世の「朕は国家なり」に端的に表わされているように、支配者＝国家＝主権の担い手であった。

ところが、フランス革命によって王制が打倒され、共和制が成立すると、主権を持つ主体が、王から、ネーション(国民)に突然代わった。「自由、平等、友愛」を唱える近代国民国家のモデルは、この時成立した。アンダーソンが言っているように、国民国家はその後、ポピュラー・ナショナリズムとそれに応える形で体制側から噴出してきたオフィシャル・ナショナリズムという形態の中で揺れ動く。

こうしたオフィシャル・ナショナリズムの問題は、植民地ナショナリズムでも基本的に認められる。つまり、反帝国主義、反植民地主義を背景に成立した植民地解放の運動は、それが、一つの国家として成立すると、途端に、国家＝ステイトの利害がその後の方向を大きく規定していく。インドネシアの場合、スカルノから権力を奪取して成立したスハルト新体制は、「ステイトの利益が最大になるような体制」とであるとされる。

この観点からは、スハルト新体制はオランダ植民地国家と基本的には何ら変わらない。インドネシア共和国を成立させた根拠は、「オランダ植民地は一つの国家になるべきだ」ということであった。曲がりなりにもインドネシアの独立革命を担ったアチェと比べて、そうした「想像された国民(＝インドネシア人)」としての歴史的体験もない西パプアがインドネシア領に入るべきだという根拠は、ほとんど旧植民地経験を共有したということに尽きる。ここで問題となるのは、「国民」という名目を根拠に、少数派を抑圧していくシステムが露骨に見られるということである。

こうした植民地ナショナリズムの変質、あるいは抑圧の機構としての国民国家という問題において、植民地ナショナリズムを経て成立してきた多くの国々が、政治的な独立を獲得しながらも、経済的な自立を図る課程で、先進国に従属を余儀なくされてきたと分析する経済還元主義の立場がある。

ところが、こうした従属理論では、ナショナリズムの変質を根源的に捉えることはできない。経済関係に還元できない植民地主義のあり方が解明されないと、植民主義からの解放はありえない。ポストコロニアリズムの課題はここにある。植民地主義は過去のものではなかった、という認識が最も重要である。植民主義につき物の、暴力と経済的な搾取、といった指標では、植民地ナショナリズムの問題は解けない。

アンダーソンが言うように、たとえば、人種主義が最も露骨に見られる場としての植民地という実体を、経済関係だけではなく、1970年代以降活発になされてきたジェンダーや、エスニシティ、批評、歴史の記述といった問題から分析する作業は、植民地・ナショナリズムの変質という問題にも是非適用されるべきである。

II. 人種、ジェンダー、エスニシティ

アンダーソンの提起した問題を、アン・ストーラーほど明解に追求している者はいないだろう。モーリス・ゴドリエの下で経済人類学を学び、1970年代に北スマトラプランテーション地帯の調査をなしたストーラーは、1985年『北スマトラプランテーション地帯における資本主義と対立：1870 - 1979』（改訂版1995）を書いた。この本は各方面から高く評価され、優れた東南アジア研究に贈られる「ハリー・ベンダ賞」を1989年受賞した。⁸ この本は1995年に改訂版が出されるが、非常に充実した改訂版序論が付け加えられ、本書の理論的射程が的確に整理されている。なお、筆者によって現在日本語に翻訳中である。

ストーラーは、自分の研究を、フーコーやサイードによって切り開かれてきた「知の権力性」研究の一環として位置付ける。これにフランツ・ファノンを付け加えると、この本が「ポスト・コロニアリズム」研究の研究史の中に位置付けられることは明白だ。だが、ストーラーの特徴は、文芸批評の観点から中心的になされてきたポスト・コロニアリズム研究を、文化人類学批判、マルクス主義的な農民／プランテーション経済・労働者研究批判といった実証性の中から、見事に位置付けたことである。

まず、文化人類学批判という観点から、民族誌的現在批判があげられる。文化人類学が20世紀初頭徹底的なフィールドワークの確立と共に幕を開けた時、民族誌を書く人類学者は、当該社会が、あたかも歴史的な過去をまったく持たない、閉ざされた社会であると仮定した。そこには植民地支配やキリスト教の影響は何も見られない、「純粋な」民族の姿があると考えられ、そうした仮定の下に、経済、親族、宗教といった項目の調査が行なわれ、民族誌の比較がなされていった。

こうした閉ざされた社会に住む「純粋な」民族という仮説は、まったく根拠がないことが次々と明らかにされた。まず、グローバリゼーションの進展とともに、世界システムへの繰り込みがますます進行していき、まったく孤立して生活している「民族」という前提が根拠を失った。また、民族誌を書く際、書き手（＝人類学者）とその研究の対象とされた人びととの間のさまざまな力関係によって、民族誌の中の「事実」が大きく曇らされてきているという反省が起きてきた。⁹

ストーラーが研究したデリを中心とした北スマトラ東海岸は、世界でも有数のプランテーション地帯である。ゴム、アブラヤシ、コーヒー、タバコなどが世界資本のために栽培されたこの土地は、ストーラーの手によって、認識上の新しい新境地を開く「約束の地」へと変身を遂げた。ストーラーの主眼は、このプランテーションの歴史をオランダ植民地支配、インドネシア独立革命とその後の国家建設という歴史の中で、資本主義がいかに、生成、発展したかを、単純に資本と階級関係と捉えることではない。ストーラーはマルクス主義の用語では階級と一口に呼ばれる実体を、人種、エスニシティ、ジェンダーといった対立の中で捉えようとした。

ストーリーによれば、階級という固有の実体はない。マルクス主義で階級と一般化されるものの実体は、すべて、白人対「原住民」、「原住民」対「移民労働者」(中国人、ジャワ人)、それに労働者の家庭の中での「ジェンダー」と人種関係、といったさまざまな対立関係の中に顕現しているというのである。¹⁰

ストーリーはさらに、1995年、『人種と欲望の教育』を書き、植民地プランテーションで成立した人種概念が、ヨーロッパで成立した「人間」観といかに共振したか、また人種概念が原住民へ投影されたさまざまな「欲望」によって深化されていったかを、詳細に抉り出した。ここでのストーリーは、人類学理論を大きく越え、フロイトの精神分析や文学テキスト、植民地時代の裁判記録といった歴史資料を多面的に分析して、コロニアル・ポスト・コロニアル・ディスコースの問題で、新境地を開いたといえるだろう。¹¹

III. ハイブリッドとヘゲモニー、主要な問題点

「植民地主義の再検討」を行なう際、日本語で読める2冊を取り上げ、そこでの主要な問題点を整理しておく。そうすることで、われわれの課題も明らかになるだろう。なお今回は、文化人類学者を中心になされた研究ということに対象を限定しておく。

まず、『植民地主義と文化』があげられる。¹²この本は、1994年のオセアニア学会でのシンポジウムで議論され、次に1995年の日本民族学会でオセアニア以外の研究者も加えてさらに議論されたものをまとめたものである。編者は冒頭で彼らの目的を次のように述べている。

地球的なマクロな視野において、ローカルな社会の文化を観察するという意味での文化人類学の立場から、植民地主義と文化の関係を検討する。植民地主義という近代世界システムの展開を背景にしながら、近代世界システムの中心からみれば局所的な辺境の小さな社会を考察の対象とする。植民地主義と文化のダイナミックな関係は、最終的にある主体 個人であれ、民族であれ、あるいは国民であれ において生きられる。それゆえ、主体を取り巻くマクロな動きを視野におさめつつも、本書では「文化を生きる主体」に注目する。

また、こうした立場は、「文化の生成論」に通じるという。「植民地支配下において、当該社会が植民地状況にいかに対処 抵抗、翻訳、流用 してきたか、さらに脱植民地下の国家形成の課程において、植民地時代の文化遺産はどのように流用されていくのか、が検討される。そうしながら、「西欧」と「非西欧」、「中心」と「周辺」、「われわれ」と「彼ら」といった二分法を越え、ダイナミックな文化生成モデルを提示したい」。

こうした共通理解の下になされた共同研究の集成が、本書である。文化人類学者による最初の植民地主義の検討である本書の意図は大いに評価できる。だが、文化人類学という

一分野の中に閉じこもっていては、せっかくの問題意識が洗練され、深化されることはないのではないか。今後の発展のためには、さらに、文芸批評、歴史、フェミニズムといった、異業種との共同作業が是非要請されるだろう。

それは、本書の最初の問題意識には端的に表われてくる。「マクロな視点をもちつつ、辺境の小さな社会を扱う」。こうした視点を持続することが文化人類学であるならば、それは困ったことだ。無い物ねだりであろうが、やはり、日本や東アジアの問題ではどうなのか？「われわれ」と「彼ら」という二分法で指示された「われわれ」とは誰であり、「彼ら」とは誰であるのか？「われわれ」の主体とは「西欧なのか」それとも「日本なのか」、あるいは西欧流の文化人類学を学んだ日本人人類学者なのか、はっきりさせて欲しいものだ。

次に、『植民地経験』があげられる。¹³

『植民地主義と文化』とは異なり、本書はそのサブタイトルに明記されているように、「人類学と歴史学からのアプローチ」を試みる意欲作である。本書、「序論」で人類学と歴史学との結びつきは、いわば「必然」であったことが、民族誌的現在仮説批判を通じて明らかにされていく。また歴史学からの人類学への接近が、アナール学派やカルチュラル・スタディーズの例をとって説明される。そうした二つの異なるディスプリンの出会いの場として、「植民地経験」というものの実体が明らかにされるというのである。

序論の冒頭でその問題が次のように整理されている。

植民地において、支配する側とされる側のいずれもが、けっして一枚岩的な存在ではなかった。たとえば、植民地に渡ったヨーロッパ人の地位も、行政官、軍人、キリスト教宣教師、商人、農園の経営者(入植者)など多様であり、本国での出身階層も異なっていたであろう。当然彼らは、それぞれの地位や出身階層によって、異なる植民地を経験しただろう。支配される側にしても、学校教育を受けた者／受けない者、キリスト教に改宗した者／しない者、都市居住者／地方居住者などの違いによってそれぞれの植民地経験は違っていた。……本書は、支配される側とする側のいずれも一枚岩でないことを出発点にして、多様なアクター間の相互作用である植民地経験のダイナミズムを 相互作用が行われる場を構成する権力関係を前提としつつ 明らかにすることを目的にしている。

こうした本書の目標に、序論以下の14本の論文は応えているのだろうか。1994年度から3年間にわたって行われた国立民族学博物館のプロジェクトの成果であるだけに、各論文はきわめて意欲的、かつ内容豊富である。地域的にはアフリカが最も多く、14本のうち、9本を占める。残り5本のうち、インドネシア2本、インド1本、オセアニア1本、それに台湾1本である。こう見ても地域的にアフリカに集中していることは否定できない。

これが本書の特徴なのであろうが、アフリカという地域にあまり親しめない読者には読むのがつらいだろう。つまり、アフリカ以外の地域の問題がいわば、付け足しのような形で配置されていて、アフリカと他の地域との関連が今一つ明らかではないということである。本書の構成にも工夫が見られず、序論の後には、各論文が一行に並べられているだけで、各論文ごとの関連性は考慮されていない。

本書の各論文を読むと、全体としての問題意識が散漫であるという印象を否めない。本書から植民地経験を一般化するのは極めて困難である。あえて一般化を求めないのが本書の特徴とも言えるのだが、本書で「植民地経験」の何を明らかにしたいのか、明確でない。たとえば、日本による台湾の植民地支配を論じた前掲の松沢論文のように、われわれが今後追求すべき問題、つまり「支配者に対する被支配者の側の驚くべき憎しみのなさは何故なのか」を指摘している重要な論文もある。だがそれが深められることはない。

本書の序文で、「私的体験の背後にある権力関係を前提にしつつ、多様な植民地経験を明らかにしたい」と述べられているが、個別の論文を読んだ後に、この序文を読むと、皮肉な感想を禁じ得ない。本書で何が明らかになったのであろうか。もう少し各論文の関連を明らかにすると同時に、各論文で取り上げられた問題同士の関連性も指摘しないと、序文に述べた「多様な植民地経験を明らかにする」という本書の本丸には迫れないのではなかろうか。それを補う意味で、編者による各論文へのコメントが本文中に示されているが、少なくとも私の役にはあまり立たなかった。

「植民地経験」の多様性を論じるのは、そうした多様性を通して、文化のヘゲモニー関係を明らかにすることではないのか。多様なものがランダムに並んでいても、読者に訴えるものは少ない。すると、われわれの目指すべき課題が見えてくる。「植民地主義の再検討」研究会で追求されるべき課題は、ディスプリンのハイブリッド性と、植民地経験にみられるヘゲモニー関係というキーワードである。そうしたキーワードを下にして、われわれの研究プロジェクトはなされていく。

IV.2001 年度の活動報告

メンバー

中島成久(国際文化学部、代表)、山本真鳥(経済学部)、柳原孝敦(経済学部)、大崎雄二(第一教養部)、米家志乃布(第一教養部)、佐々木直美(第一教養部)、高柳俊男(国際文化学部)、熊田泰章(国際文化学部)、今泉裕美子(国際文化学部)、吉村真子(社会学部)、元木淳子(工学部)、藤原久仁子(第一教養部兼任講師)

注) 吉村真子、元木敦子、藤原久仁子の三氏は2001年度はオブザーバー参加、2002年度より正式メンバー。

プロジェクト研究会活動

2001 年 5 月 24 日

第 1 回研究会

中島成久(国際文化学部教授) :

「コロニアル・(ポストコロニアル)・ディスコースから見た改革期インドネシア tanah ulayat(共有地)問題を中心として」

2001 年 7 月 13 日

第 2 回研究会

米家志乃布(第一教養部助教授)

「地図とコロニアリズム 松浦武四郎の蝦夷地「探検」

2001 年 11 月 8 日

第 3 回研究会

山本真鳥(経済学部教授)

「カテゴリー化の困難 サモア植民地統治における混血の役割」

2002 年 1 月 18 日

柳原孝敦(経済学部助教授)

「恋愛、植民地、小説 19 世紀イスパノアメリカ恋愛小説」

* 各研究会は、いずれも、ボアソナードタワー 2 5 階 C 会議室で行われた。

¹ 中島成久、「国民国家と人種主義」「異文化」法政大学国際文化学部紀要、第 2 号、2001 年。

² Benedict Anderson, *Imagined Communities*, 1991 (Revised Edition), pp.144-5.

³ 「原住民」という言葉は、「差別語」として、現在、「先住民」という言葉にとって代られつつあるが、台湾では「生蕃」と呼ばれていた高砂族の人々自身が、「原住民」という言葉を用いているということで、あえて、そのまま用いる。松沢員子、「日本の台湾支配と原住民の日本語教育 パイワン社会におけるカタカナの受容」『植民地体験 人類学と歴史学からのアプローチ』(栗本・井野瀬編)所収。

⁴ 韓国ナショナリズムの基本は、「反共、反日」であり、その点で、台湾の場合、反共では韓国と一致しても、反日という軸では一致していない。姜尚中『ポストコロニアリズム』作品社、027 頁参照。

⁵ ウォーラーステインの世界システム論では、ポピュラー・ナショナリズムも植民地ナショナリズムも、ともに、「反システム運動」として一括される。

⁶ Anderson, *ibid*, p150.

⁷ ベネディクト・アンダーソン、「古い国家、新しい社会 比較史的観点から見たインドネシアの新体制」『言葉と権力：インドネシアの政治文化探求』（中島成久訳、日本エディタースクール出版部）、1995 年。

⁸ ストローラーは下書きの段階で原稿をアンダーソンに読んでもらっている。そうした意味でも、アンダーソンの問題意識への共感がストローラーに強くあったことは伺える。

⁹ 中島成久、「異文化への視線」『文化人類学』法政大学通信教育課程用テキスト、2002 。

¹⁰ Ann Laura Stoler, *Capitalism and Confrontation in Sumatra's Plantationbelt, 1870-1979*, The University of Michigan Press, 1995(Revised Edition).

¹¹ Ann Laura Stoler, *Race and the Education of Desire*, Duke University Press, 1995. さらに次の本を参照せよ。Frederic Cooper and Ann Stoler (eds.), *Tension of Empire: Colonial Cultures in a Bourgeois World*, University of California Press, 1997.

¹² 山下晋司・山本真鳥編『植民地主義と文化 人類学のパースペクティヴ』新曜社、1997 。

¹³ 栗本英世・井野瀬久美恵『植民地経験 人類学と歴史学からのアプローチ』人文書院、1997 。